

終電が通り過ぎてしばらく経った郊外のターミナル駅。

ベンチに座りこんで船を漕いでいる酔っぱらいを横目に、小さなため息を付く。

やれ緑が多いだの、住環境がいいだの、都内と変わらないくらい栄えているだの、とは言いが、この時間になるとともに営業している店さえおぼつかない。

——乗り換え無しで都心出られますし、いいところですよね！

添えられる感想はだいたい同じで、まるでカンペがあるかのようだ。

すっかり見慣れてしまった、"都心まで三十分"を主張する色褪せた看板。

俺もそのキャッチコピーにのせられたクチだったのだが。

もとより、"三十分"としか書かれていないから、遠い取るか近い取るかは受け手側の問題なわけだった。

かろうじて都会を思わせる24時間営業のコンビニを通り過ぎると、そこからはシャッターが閉められた人気のない商店街が続く。

残念なことに、ここの店々が営業している時間に帰れることは少ないのだが。

商店街を抜けて交差点を渡ると、だんだんと街頭が少なくなっていく。もはや他の誰ともすれ違うこともない。

そんな人寂しい道を、今日の俺は上機嫌で歩いていた。

まだ夏も終わらぬこの季節だ、決して寒くはない。緩めたワイシャツの首元から入ってくる涼しい風に、俺は顔を緩める。

——いつもは一人で歩く道だ。

「なあー、まだかー？」

能天気ながらも、深みのある声。

すっかり後ろを振り返るのを忘れていた俺は、歩みを止める。
さっきから声がしなくて不安だったのだが、ちゃんと起きていたか。

足元を見ながらふらふらと歩く彼は、大きな手で目を擦りながら俺を見る。

「もう少しだよ。ほら、がんばれー」

「おうわ、わあったから、サガちゃん、押さないでー」

その大きな肩にぽんぽん、と触れる。
途端、手のひらから伝わってきた温もりに、思わず顔に熱が集まるのを感じる。

その時、強いアルコールの匂いに混じって、ほのかに彼の体臭が鼻孔をくすぐった。
少しクセのある、でも、どこか懐かしいにおいだった。

「俺、この駅初めて降りたー。なんか、いいところだねー」

「そうかな、思ったよりなんもないよ？」

「うーん、緑が多くてー、住みやすそう。それに、まあまあ都会、だしー」

今日ではない何処かで、何度も聞いたフレーズだ。
その事実を知るよしのない彼にこの気持ちを伝えられないのがもどかしくて、俺は何となく悪態をつきたくなった。

「……セイちゃんも同じことを言うか」

「んー、おなじ？」

いや、何でもないよ。そう笑って、俺はもう一度彼の肩にそっと手を置いた。

我が家までは、もう少し。もう少し、がんばれ。

[1]

事の発端は、機械音痴な俺が生んだ偶然だった。

転勤族の親を持つ俺は、小学校、中学校、高校と、ことあるごとに親に巻き込まれ、気づけば、故郷という故郷はどこにも無かった。

使うあてのない、地域名産品に関する知識だけが、蓄えられていく。

幸い友人には恵まれて、いじめられるようなことはなかったが、引っ越しのたびに、「また会おうね」という、恐らく叶わないであろう約束を重ねていくのだった。

その、心の奥に突き刺さった小さな痛みも、いつしか忘れ去られ、自分がしでかした失敗もまた、同様に溶けてなくなっていくはずだった。

そんな、ただこぼれて行く時間の中で、まどろんでいた俺の肩を叩いたのは、叶わないはずの"約束"だった。

【15years】

[2: 嵯峨山]

「えーっ！嵯峨山(さがやま)君、RAINやってないの！？」

「あ、はい。なんか、そういうの苦手で」

「今はみんなやってるよー！せっかくスマホ買ったんだし、始めてみたら？」

「うーん、そうっすね……」

「よし！じゃああとでID教えてね。みんな知りたがってたし」

お昼休みにゴメンね、そう言って颯爽と去っていったのは、俺の直属の上司の山門(やまと)さんだ。

誰よりも仕事を愛する女性で、歳を言われてもピンと来ないほど見た目は若く、エネルギッシュという言葉がピッタリだ。

気づけば、いつも皆の輪の中心にいるムードメーカー。

甘いものが嫌いで、というだけでもかなり珍しいのだけど、その中でもケーキが一番の苦手ときている。喫茶店でも皆がこぞって甘いものを食べる中、一人でコーヒーゼリーを突っつきながら、このお店も甘すぎる、と文句を垂れているのが本当に面白い。

相当なキャリアウーマンといった風だから、仕事一筋かと思いきや、最近結婚するとかしないとかいう噂が実しやかに流れている。それなのに、俺の連絡先なんかを聞いてどうするんだろうか。

——まあ、良いか。

興味がなさそうな雰囲気を出しすぎてもいけないし。考えてみれば、こういった話題は無難に流しておくのが社会人というものだ。

嵯峨山くん、と呼ばれていたのは自分のことだ。

うちは技術系のコンサルタント業務をなりわいにしている会社で、自分も例に漏れずコンサルタント業務に携わっている。この拠点は比較的女性比率が高いのだが、何かと縁があって、入社後、十数年を数えようとしている。不思議と、居づらいと感じたことはない。

入社当初は、俺自身が強面な風貌をしているのもあってか、自分もそうだし、周りも気を遣って接してくれていた。だから、あまり喋らなくとも周囲の人が勝手に俺の考えを補完してくれる、ということがよくあった。その親切に甘んじてしまった節はあったものの、業務を通じて交流を深めていくことで、今は、"見た目はゴツくてあまりしゃべらないけど怖くはない人"というポジションに収まる事が出来

た、と思っている。

あまり大きな会社ではないから、入ってくる新人も少ない。うちの拠点の規模を考えると、新卒の受け入れは数年に一人がいいところだから、いつまでも若い子扱いをされているのだが、もう三十も半ばなのだ。

体力の衰えを感じることはまだないものの、しっかり歳を取っていることは自覚しなければならない歳である。近年のこだわりは健康診断の結果にAを並べることで、未だに継続中だ。……無論、今年も達成予定である。

少し離れたところで立ち話をしているであろう山門さんの周りが騒がしくなってきた、合コンだとか、優良物件だとかの単語が聞こえてきたが、自分には関係ないはずだ、決して。

手元の時計を覗きこむと、針は丁度ど真ん中を過ぎた頃だった。残りの昼休みは、あと20分といったところか。その時計の針の"かたち"は、川沿いの土手に腰を下ろしている人のようにも見える。……天気が良ければ、そういう昼時の過ごし方もいいな。

さて、昨日、良いところまで読んでいた推理小説を読み進めるか、それとも、この新しい相棒——携帯電話——と戯れることにするか。

というのも、二つ折りの無骨な形の携帯電話を使い続けてきた俺だったが、先日、ついに電源が入らなくなってしまったのだった。

悲しみにくれていた俺が、その旨を山門さんに伝えたところ、烈火の如く勧められたのが、このタッチパネル式の携帯電話だった。

開きっぱなしのノートパソコンには、誰もが使っているポータルサイトが表示されていて、その両脇にはタッチパネルを謳う携帯電話の広告がでかでかと主張している。

そこには親子で自撮りをする図、音楽プレイヤーとして使う学生、の写真が載せられているが、いずれとも縁が薄い俺は、何とも微妙な気分で、もう一度ため息をつく。

会社の補助も出るし、買うなら今でしょ！と言って喜んでいたのは、やっぱり彼女だけだったのかもしれない。スマートフォンと呼ばれるものだそうで、世の中の若い子達は、"みんな"使っているそうだ。

(みんな、ねえ。みんな、ってのは一体誰なんじゃい。)

仕事で使うものとはいえ、俺の意思は一体どこへ行ったのか。まあ、はじめからそんなものはないし、口にしたところで押し切られるのがオチだ。もちろん、携帯電話の件では前々から周囲に不便を押し付けてしまっていた自覚はあったので、年貢の納め時なのかもしれない。そう考えることにして、今日二つ目、の大きなため息を付いた。

すると、女性陣のよく通る声に混じって、聞き慣れた足音が近づいてくる。

「おうおう、シケた顔してんなあ。また山門さんか？」

「わかってるなら聞くなよ」

「お前、また合コン誘われるぞ。いい加減相手見つけろよなー」

「カジも来てくれるんだろ。頼りにしてるから」

「……、だ一、んも一。ほんと、仕方のない奴だなあ」

そう言って頭をかくのは、同期の梶田(かじた)だ。

入社後、最初の部署で一緒になってからというもの、何かと縁があって今でも近くで働いている、気の置けない奴だ。無駄にでかい図体の俺とそうかわらない風貌で、俺よりも少し背が高い。精悍な顔付きも相まって非常に健康的に見えるが、少し落ちてきた筋肉と、その分ついてきた脂肪が気になっているようだ。

二児の父親で、4歳の男の子と、2歳の女の子が居る。最近奥さんが構ってくれなくなったとかで、もっぱら残業が恋人だそうだ。その想像に漏れず子煩悩で、携帯電話の待ち受け画面が日によって変わるくらいにはコレクションがあるそうだが、「初めて子供がおとーさんと呼んだと思ったら、それは電話だった」というエピソードを事あるごとに持ち出してくるあたり、本当にショックだったんだろうなと思う。

それにしても、そんな声を張り上げるような話題だろうか。もっと小さな声で言えばいいのに。数パーテーションくらい向こうで話をしているであろう山門さんの視線を感じる気がする。そんな杞憂をよそに、俺の手元を覗き込んでくる彼。

「そんで買ったのか？スマホ。あ、買わされたのか」

「ああ、まだ全然使い方がわからなくて」

「お前、頭はいいのにこういうのは全っ然だめだよな」

"全然"に、やたらと力が入っている。わかっていることだし否定はしないが、それでも俺はムツとしてしまう。そして、貸してみろ、と言うや否や、俺の"スマホ"は取り上げられてしまった。

——まあ、良いか。

あれ、これは二回目か。

梶田は、こういった機械にはめっぽう強い。先程のRAINの下りも耳聡く聞いていただろうから、こいつに任せてしまえばいいだろう。

お互い技術系出身だったはずだが、どこでこんなにも差がついてしまったのか。梶田曰く、「遊んでたら色々覚えてさ、もともと俺、器用だし」ということだった。暗に、俺が不器用だ、ということを指摘された気がしなくもない。

「サトシー、電話番号」

「あ、今書く」

俺の名前は寿英(としひで)と言うが、嵯峨山(さがやま)から"一文字"取ってつけたこのあだ名が、彼のお気に入りのようだ。

「さ」がやま「とし」ひで、で"サトシ"となるから——らしいが、強引にも程がある。これまで色々な呼

び方をされてきたが、そう呼ぶのは今のところ、というか、今後も彼だけだろう。名誉なことなのかどうかはわからないが、梶田家の長男の名前は、俺の名前から拝借して、智寿(さとし)と付けられたそうだ。

ちなみに、こいつの名前は秀也(しゅうや)だが、俺はカジと呼ぶのが気に入っている。少しだけ重みのある万年筆を走らせていると、その様子を見て彼が呟く。

「ホント字、綺麗だよなー」

「カジが汚すぎるだけ」

「なにおう。俺はスマホでメモるからいいの！」

その"カジ"が、折り曲げた右手の人差し指で端末をノックしながら、口元を和らげる。

大学ではもっぱら"遊んでいた"という彼は、同期とはいえ歳が2つ上だ。とはいえ、気軽に絡んでくれ、情にも厚くてとてもイイ奴だ。大雑把そうに見えてマメ、というのもまた梶田らしい。

かれこれ十年ほどの付き合いになるが、未だにこうやって友人でいられるのは、彼が俺のことを本当によく知っていて、そして、気にかけてくれているからなのだろう。

入社したばかりの頃は、厳つい風貌もあり近寄りがたい雰囲気があった梶田だが、一度話してみると、すぐにその印象は誤っていたのだとわかった。むしろ、お前の方が怖かった、と事あるごとに口にする梶田と、いや、お前のほうが、と言うネタは、今となっては定番だ。近くで聞いていた山門さんは「どっちもどっちだよ」と切り捨てたのだったが。

熱心に端末を覗きこむ、精悍な顔をじっと眺める俺。所々白くなってきた毛が気になるというが。

うーん、黒と白のコントラストは綺麗だと思うんだけどな。この話題を振ると、最終的に俺の頭がわしゃわしゃとされるのがわかっているの、それ以上は何も言わないでおく。

「おし、できた。電話帳の奴らも入れとくか？」

「ああ、とにかく使えるところまで頼む」

「りょーかい。後でメッセージ送っとくから、ちゃんと返事するんだぞー」

いいかい、サトシくん。そう言って、再び端末を操作し始める。大きな指で、小さい端末を操る姿は、どこか滑稽で、どこか可愛らしい。まあ、こういった輩をかわいい、と表現するのはおかしいのかもしれないが。

手元の端末を触りながら、近くの駅の再開発計画や、閉店したお店のランチの話題、そして既婚者あるあるな、子供が騒いで寝られないといった家庭の悩みを聞いて。

結局、残りの昼休みを丸々費やしてくれた梶田は、設定を終えた携帯電話と、"俺、豚肉より牛肉の方が好きなんだよね"という謎めいた置き言葉を残して、自席に戻っていったのだった。

[3]

水曜日はノー残業デーだ。だいたい会社で形骸化しているこの制度は、ところが、この会社では根付いているようだった。それも、偉い人が周りを引き連れていくという、今の世から取り残されているのではないか、という気風が、ここにはある。

当然、会計は偉い人が全て持つことになっていて、ひどく男前だ。山門さんは女性だが。ちまたでは、"山門予算"が存在するという噂があるが、真偽は定かではない。

「行けない人いるー？」

「これ終わらせてから行きます」

「……あ、すみません、俺、今日はコレでして」

いつもは真っ先に立候補する後輩が、申し訳なさそうに言う。うちの拠点では一番の若手で、直属の後輩である拝島(はいじま)だ。

俺や梶田とは違い、標準的な体型でやや垂れ目で、愛嬌がある顔立ちをしている。

とはいえ、学生時代はサッカーをやっていたそうで、小柄ながらも線は細いわけではない。その礎は、今でも隔週で参加しているというフットサルによるものだろう。活動的でコミュニケーション力も高いから、女性陣だけではなく、男性陣にも可愛がられている。

それにしても、頭に手を当てて言うコレとはなんなのか、というのは口には出さないことにした。だが、そんな心配は杞憂だったようで、周りの先輩方にもみくちやにされる拝島。やっぱり、なんの心配もなかった。

「酷いっすよ山門さん！髪セットし直さないと……」

「はいはい、がんばんのよー。あとはいないねー？」

じゃあ行くよー！そう言って、山門さんを筆頭にオフィスから出ていく面々を見送る。

賑やかな波が引いていって、一気に静かになる執務室。勤務時間が終わるとともに空調は切れて

しまうから、今聞こえるのは起動中のパソコンから聞こえるファンの音と、時折聞こえる鉄道の発車ベルの音だけだった。いや、耳を澄ますと電気ポットの音が聞こえるのかもしれない。電源を切るのを忘れないようにしなければ。

——あ、その前に仕事か。

我に返って、もう一度目の前のパソコンと向かい合うことにする。

画面には、八割ほど書き上がっている英文メール。場所はいつも同じところだからと、当社比90%くらいの速度でキーボードを叩いていた俺に、後ろから声がかかる。

地球の裏側に向かっていた意識が、光の何分の一かの速度で"ここ"に戻ってきた。

「嵯峨山先輩！」

「……ん、拝島か」

今日「コレ」があるという拝島だ。荷物は小さい肩掛けカバン一つと、軽量だ。その片手にはスマートフォンが握られていて、今風の若者っぽさを感じる。帰ったんじゃないのか。とすると、忘れ物かなにかだろうか。

「今日は"アレ"があるんじゃないのか」

「はい、"アレ"はあるんですけど、ちょっと聞きたいことがありますて。……これって先輩であってます？」

「……これ？」

そう言ってみせられた画面には、アドレス帳のようなものが表示されていて、"サトシ"という名前とともに向日葵畑の写真が添えられていた。この写真には見覚えがある。確か、一昨年の旅行で隣県の山の方へ行った時の写真で、梶田に撮ってもらったものだ。

俺の手だけが映っている写真で、見分けがつかなくて面白い、と余計なコメントを添えられたものだった。撮った梶田が一番気に入っていて、待受ローテーションの中にいつの間にかこの写真が入っていたときは、さすがの俺も頭を抱えてしまった。

「先輩、いつの間にRAIN始めてたんですね」

「カジが設定してくれてな。それにしても、サトシじゃ誰もわからないだろうに」

「向日葵の写真でわかりましたよ。先輩っぽいし」

確か、梶田先生がいつもそう呼んでたのを思い出して、と付け加える。お前、その先生ってのはどうなんだ、と突っ込むのだが、うーん、やっぱり先輩ってより先生なんですよ、梶田さんは、と悪戯な笑いを浮かべるだけだった。

自分のスマートフォンを取り出して、そのまま拝島に差し出す。手渡した端末を危なげなく受け取ると、そのまま彼が何度か画面に触れる。数瞬後、よかった、確かに先輩っすね、そう笑って端末を返してくれた。端末には、さきほどの例の向日葵の画像が映し出されていた。

「多分そうなんだろうなとは思ったんですけど、一応確認しときたくて。間違って連絡しちゃうのも嫌だなあと」

「なるほど、たしかにそうだな。俺もそれは心配なんだが……」

「ですから、連絡取りそうな人をお気に入り登録しておきました。先輩、こういうの苦手でしたよね」

そう言われて手元の画面を見てみると、なるほど、会社の面々がリストの上の方に表示されるようになっていた。見覚えがある名前が並んでいて、一安心する。

ついでに先輩の名前も嵯峨山に変えときました。いいでしょ、そう言って笑う拝島に、仕事が早いな、と付け加える。さすがデジタル・ネイティブ世代だ。

「ありがとう、便利なものだな。拝島はその、使いこなせているのか」

「そうですね、ええと、こんな感じで」

差し出された拝島の端末を覗き込む。連絡先リストだと思われるところには、各人が好き勝手に付けるのか、名字とも名前とも似つかないような文字列が並んでいた。見ても大丈夫ですよ、というお言葉に甘えてメッセージのやりとりを見せてもらう。確かにメールを打つよりは手頃だし、相手が読んだかどうかといったことまで分かるようだった。

「……しかし、これでは、誰が誰だかわからないな」

拝島の画面では、話し相手がすべてニックネームで表示されていて、一見すると誰と連絡を取っているのかわからない。一方俺の端末には(拝島が設定してくれたのかもしれないが)、しっかり姓名が表示されている。

「面白いですよ。山門さんのニックネームは、"いっぽん"、なんですよ」

いつも一本取ってやりたいと思っているから、だそうで、と言われても、正直意味がわからない。思わず首を傾げると、少しだけ考える素振りをした後、山門さんに聞いてください、そう言って拝島は笑った。

「俺は”ハイジ”なんですよ。お前はこれしかない！って。なんか、適當すぎるなって」

「なるほど。まあ、積極的に呼ばれたい名前ではないよな」

「全くです」

でも、今は割と気に入ってるんです。と、恥ずかしそうに言う彼と、二人で顔を見合わせて笑う。
これで先輩に連絡取りやすくなりますね、と微笑む拝島に、お前のおかげだな、と付け加えた。先輩の端末にはちゃんと"拝島"と出てるはずですから、と聞いて安心する。

「先輩は、まだもうちょっとかかるんです？」

「いや、もう終わるところだ」

「じゃあ、よかったら一緒に出ませんか？」

「ん、分かった」

「了解です！俺、戸締まりしてきますね」

ついでお手洗い行ってきます、そう言って、彼は早足で出ていった。
よし、かわいい後輩のためにサクッと終わらせてしまうか。そう、一人で意気込んだあと、腕を組んで残りのフレーズを思い浮かべるのだった。

その後、最後の数文はすぐに思いついて、当社比20%増くらいのスピードでキーボードを叩いた後、送信ボタンを押すという重大な任務を終えた俺は、拝島と並んでエレベーターを待っていた。先方はこれからがオフィスアワーだろうから、返信は少し遅れる可能性がある、という一文を付け加えておいたのだった。そういえば、と思って彼に声を掛ける。

「今日はどの辺りまで行くんだ？」

「ええと、大学の方です。だから、川沿いの方っすね」

そう言って、夏は花火大会で人が押し寄せる、著名な河川の名前を挙げる。彼の出身大学を思い浮かべて首をかしげると、あの辺りにサテライトがあるんですよ、と付け加えてくれた。

「あっちまで行くのか。結構遠いんじゃないか？」

「そうですね。でも、電車を乗り継いで……えーと、二十分くらい、かな」

著名な地下鉄の路線を挙げながら、指折り数える彼。このあたりには縦横無尽に線路網が走っているが、意外なところが遠かったり近かったりするのが電車の怪だ。

「まあ、ちょっと乗り換えが面倒なんですけどね」

「思ったより近いんだな、びっくりした」

そうでしょう、と得意げに言う拝島に、でも俺の三十分は遠いんだよな、という話をする、それは通勤快速の話でしょ、と拝島が応じて、お互いに顔を見合わせて笑った。エレベータから見える夜景

は、今日も綺麗だった。

三枚目の自動ドアを通過すると、ようやく外気に触れることができた。

汗ばむような気温ではなかったのだが、先程まで冷房が強めに効いていたオフィスにいた我々からすると、暑苦しさを感ぜずにはいられない。

最寄り駅までの数分の道のりを二人で歩きながら、俺は拝島から今日行く予定だという美味しい中華料理屋の話を聞いていた。

「じゃあ、また明日。楽しんでこいよ」

「ありがとうございます！先輩の方も！また、明日」

手を振って拝島を見送る。それに大きく応える拝島の姿が見えなくなった後、俺はいつもの道を歩き始めた。途中、ふと気付いて、先ほどまで話題の中心にいた物体を鞆から取り出す。

——ちゃんと返事するんだぞー。

そうだ、梶田に言われていたんだった。

交差点の信号待ちの際に思い出して、スマートフォンを開く、ではなく、ボタンを押す。画面上をなぞるという操作にまだ慣れていない俺は、悪戦苦闘しながらも、何とか梶田との会話画面までたどり着くことに成功する。この操作を数秒のうちにやっておける彼らは、やっぱり新人類だな。

(……梶田、と)

既に梶田から来ていた、牛肉食べたい、というメッセージを無視して、これから向かう、という旨を言葉通りに伝える。

(送信……は、あっさりなんだな)

あまりにもあっけないものだから、本当に届いたのか不安になったのだが、すぐに既読——相手が読んだ、ということらしい——がついた。うん、ちゃんと送られているらしい。一安心して、役目を終えた彼を鞆に仕舞おうとしたところ、それはあかん！と言わんばかりに彼が震えた。どんな速度で打ったのだろうか、それは数文に渡る実況コメントだった。

——いつもの席、ね。

ご丁寧に座ってる場所と、空いている席まで添えてある。さすが梶田、としか言えない。

要約すると早く来い、ということだった。返事をするよか少しでも早く向かった方が良いだろうと思ひ、俺はもう一度彼を鞆に押し込んで、お店までの道を急いだのだった。

[4]

「今日も楽しかったなー」

「カジ、飲み過ぎだぞ」

「サトシがいるからダイジョーブ！問題ない！一番いいのを頼む！」

うーん、いろんなネタが混ざってる気がするが。いちいち突っ込む気力もないので、ここはスルーすることに決める。

「わかった。頼むから他の人には絡むなよ」

「ダイジョーブ！」

尊い犠牲だった、とか、どうのこうの言っている梶田の肩を支えながら、俺は駅までの道のりを歩いていた。なんだかんだ飲む量はわきまえている梶田としては、珍しいくらいの酔いっぷりだ。

「……サートシー」

「はいはい、ここに居るから」

カジ、そう呟いて、大きな肩をぽんぽん、と叩くと、俺の肩に置かれていた彼の手の力が少し強くなる。

何かあったんだろうな、そう察した俺は、梶田が切り出すのを待つことにして、黙り込んでしまった彼の肩を支える力を強くしたのだった。

"いつも"のビアガーデンは、今年一番といっても過言ではないほどのお客で溢れていた。

もう夏も終わりにかけて秋、という頃合いだから、外の気温はちょうど良い。暑すぎるのもだめだし、寒すぎるのも嫌、となると、今年イチの集客は実はこの時期になるのかもしれない。

ガヤガヤ、と言う喧騒を心地よく感じながら、梶田に言われた"特等席"を探す。

「嵯峨山君ー！」

甲高い声に混じって、サトシー！と呼ぶ低い声が聞こえる。

振り向くと、既に面々は揃って、ではなく、出来上がっていて、でかい図体の梶田がこちらに大きく手を振っているのが見えた。なるほど、ガラスのフェンスで遮られているだけのそこは、遠く、までとは行かなくとも、あたりの風景はだいたい見渡せるようなイイ席だった。少し前まで、この国で一番高かったタワーが赤く光って見える。

一度座ったら席の移動は難しいだろうと判断した俺は、隣の椅子を叩く梶田のところへ向かう前に、先に到着している面々に挨拶をして回ることにした。

「嵯峨山くん、早かったね。よかったよかった」

「ええ、お陰様で。例の件は大濃さんにもCCしときましたので」

「助かるよ。とりあえず明日ということで、今日は飲もうね」

ほら、梶田くんが呼んでるよ、と言って顔をほころばせるのは、今回の案件と一緒に担当した先輩の、大濃(おおの)さんだ。

風貌は人が良いおじさん、といったふうで、職場の中では決して目立つほうではないが、よく見落としに気づいてくれて、的確なフォローもしてくれる、心強い存在だ。人当たりもよく、チームを綺麗にまとめている。山門さんがチームの太陽だとすると、大濃さんは月のイメージがしっくりくる。

ありがとうございます、ともう一言お礼を付け加えて、大濃さんの元を後にした俺は、早く座りなよーという声を横目に、梶田のもとへ向かった。

「席とつといたぞー」

「確かに、いつもの席だな」

「もちろん、サトシは俺の隣がいいんだもんなー」

「否定はしないが」

ニカッと笑う梶田の前には、空になったジョッキが既に二本。下げてもらえばいいのに、そう思いながらも、慌てて駆け寄ってきた店員さんにオーダーを伝える。

「ヒューガルデングレーを」

「あ、俺もそれで！」

注文をかぶせてくるのはいつものことだ。テーブルの空いたグラスを見る暇もなく、早足で去っていく店員さん。きっと忙しいんだろうな。手元の皿に目を落とすと、野菜やら、肉やらが小奇麗に載せられていた。梶田のその心配りに感謝しつつ周りを見回すことにする。

「相変わらず揃いがいいよな」

「ホントなー、俺じゃあこんなに集められんわ」

うちのチームは、女性比率が高い。今日は拝島がいないから、いつもよりその傾向が色濃く出ている。七人中四人が女性——という、図らずも、合コンのような状態になっていた。あくまで男女比だけは、だが。

「開始が早いからな。一次会で帰れるなら、ということなんだろう」

「なるほど。流石サトシセンセー」

「そこのカップル！真面目な分析しないで私の話を聞きなさい！」

すかさず山門さんに突っ込まれる。彼女の前にもワイングラスやらジョッキやらが並んでいて、ハイペース感が醸し出されている。傍から見たら華やかに見えるのかもしれないが、それにしても元気が良すぎる。大学生の方が、もう少しおしとやかに飲んでいるだろう。

山門さん率いる女性陣（俺たちは山門組と呼んでいるが）は強烈で、既婚者も混じっているが、殆どが腐っている（本人たち談）というおまけつきだ。だから、その美貌に期待して寄ってくる男どもは、ことごとく跳ね返されてしまうというわけだ。

お待たせしました、と言って目の前に置かれたグラスを持って、乾杯の声を待つ。

「もっと飲もー！」

その鶴の一声から、乾杯！につながる。そんな強く当てたら溢れるだろう、といつも言うのだが、お構いなしにグラスをぶつけて来る梶田。そして、そのまま俺の肩を抱き寄せるものだから、いつものように女性陣から黄色い声が上がる。またか——と、俺は大きなため息をついた。

「どうしたー、サトシ、そんな顔すんなよー」

「そうよー。ふたりとも付き合っちゃえばいいのに！もったいなーい！」

そう声を上げるのは、山門組の切り込み隊長、栄(さかえ)さんだ。

快活、というよりはいいところのお嬢様、という風貌の彼女だが、一度喋り始めるとそれを止めることは非常に困難だ。黙っていたら、という枕詞は彼女のためにあるのかもしれない。

うちのチームではかなりの古株だが、それを感じさせない熱量で若手からの支持は篤(あつ)い。実は山門さんの大学の後輩で、学生時代からの付き合いだそう。梶田と歳が近く、二人が(仲良く、ということにしておこう)言い合っている姿もよく見られる。

「やめてくださいよ、栄さん」

「そうですよ！もう付き合ってるようなもんじゃないですか！次は結婚ですよ！結婚式、楽しみにしてますから！」

栄さんの悪ノリに食いつく形でそう意気込むのは、うちの部では年少の部類に入る滝(たき)さんだ。

女性という雰囲気もそのフレーズで台無しだ。いや、付き合っていないし。それに結婚って。そもそも俺、男だし。梶田は既婚者だし。付き合えないし。

いい意味でも悪い意味でも山門組に大きく影響を受けている彼女だが、プライベートはともかく、仕事では大活躍しているようで大変結構なことではある。大学時代は準ミスに選ばれたくらいの美貌の持ち主で、拝島によると同僚や後輩、先輩問わず人気が高いらしい。人生とはかくもわからないものである。

ツッコミどころが多すぎて、もはや何も言えずに居ると、梶田がビール片手に肘をついて言う。あ、このサーモンマリネ、美味しい。

「結婚なー。俺はしたいけど、奥さんいるしなあ」

「……いや、否定しろよ」

「愛があれば不倫だって怖くない！」

その言葉にどっと笑いが起きる。何だそれ、標語にすらなっていないぞ。果たして、旦那さんの前でその台詞を言えるのだろうか。栄さんなら……まあ、言いそうだな。横に目をやると梶田も一緒になって笑っているが、俺が見ればそれは苦笑いであることは一目瞭然だった。

「君たちはホント兄弟みたいだな。羨ましいったら」

大濃さんがニコニコしながら、そこに付け加える。そうそう、兄弟、きょうだい。どっちが兄で、どっちが弟でもいいけど、決して夫婦ではない。すっかりお父さんキャラ化してしまっている大濃さんだが、梶田とそんなに歳は変わらないはずだ。俺たちは、どこで何を間違えたんだろうか。

「ほんとですねえ、お二人を見てると飽きません」

そして、その様子を、隣で楽しそうに眺めている青葉(あおば)さん。こちらも二児の母で、上のお子さんは既に中学生という、スーパー兼業主婦だ。

食の趣味が近いので、週に一度くらいはお昼会が開かれる。最近のブームはアジア料理のようで、皿を埋め尽くすほどのパクチーを幸せそうに頬張っている姿が印象的である。

山門組の唯一の良心だった彼女も、徐々に毒されてきているというから油断できない。アンテナの高い拝島情報によると、他の三人に引っ張られて、BLカフェなるものに連れて行かれたのを見た、そうだ。

俺がなんとも言えない表情を浮かべているのに気づいたのか、梶田がほとんど空になったジョッキを傾けながら零す。

「俺らのことはいいから、他の話にしましょうよ」

「えー、つまんなーい」

「いいからいいから」

ちょうどそのタイミングで、デザートが運ばれてくる。わあー、と黄色いともいえなくもない歓声が上がる。注文はアラカルトで、ということだったので、山門さんは代わりにスープを頼んでいたようだった。

色とりどりのスイーツの中で、俺の目の前に置かれたのは、大好物の一つ、生クリームの添えられたチーズケーキだった。

各人の好みを絶妙に反映しているこのチョイスは、梶田の仕業に違いない。つまり、本当の助け舟はこのタイミングだった、ということだ。栄さんたちの興味がデザートに逸れたところで、俺は青葉さんに声を掛ける。

「そういえば青葉さん、近くにできたタイ料理のお店、もう行きました？」

「あ、あそこ、まだ行けてないんですけど、気になってるんですよ。駅の裏手のところですよ」

「ええ、そうです。グリーンカレーが絶品らしくて。付け合せの生春巻もイけるそうです」

「イイですねー。早速明日にでも行きましょうか」

「あーずるい！ 私も行く！」

大濃さんと真面目な話をしているかと思えば、すかさず突っ込みを入れてくる山門さん。聖徳太子並の耳は衰えていないようだ。さすが山門礼子、恐るべし…。そこに、チョコレートケーキを頬張りながら梶田がぼそっと呟く。

「山門さんって、辛いもの好きですよ」

「ふふ、人生は決して甘くないものなのだよ」

「出た！それっぽい格言ー！」

まあ、不倫なんて怖くない！よりはマシだよな、と大濃さんがぼそとこぼすと、すかさず栄さんが反論して、また場が盛り上がっていくのだった。

プラットフォームのベンチに腰をおろした俺たち。一応平日ということもあり、人はまばらだ。

次の電車は、まだ十五分くらい先だ。それに加えて、いつものように終電待ち合わせで遅れるというアナウンスが流れている。ふう、とため息をついて背もたれに体重を預けると、ベンチが頼りなく軋む音がした。となりに座っている梶田がおおきくため息をついて姿勢を崩す。カバンが手から落ちそうになるところを、俺が支える。

「サンキュ。……滝さんがさ、最近しつこくてよー」

「はは、今日も絡まれてたもん」

「飲み場はいいんだけどよ、仕事中にも来るもんだからさー」

「ほんと、好かれてるよな」

「俺じゃなくてサトシに聞けばいいのによー。それじゃあ面白くないって言うんだわ」

ありゃあセクハラだぞ、と、聞かれた内容を耳打ちする彼に、思わず身震いする。うーん、ギリギリシモの話でないだけセーフか。

「……最近の若い子は、よーわからん」

「そうだなー」

俺らみたいなオジサンは放っておいて、自分の恋を追っかけたらいいのに。まあ、結婚式はもつぱ

ら参加専の俺が言えることではないか。

もともとは栄さんを筆頭に暴れまわっていた山門組だが、最近勢いがあるのは最年少の滝さんのようだ。そのポテンシャルは山門さんを凌ぐとまで言われている。栄さん曰く、期待の大型新人、ドラフト一位、逆指名級とのことだ。最近の関心事はもっぱら梶田のようで、事あるごとに突っ込んできては、きわどいことを聞かれるとのことだった。

「触らぬ"神"にはなんとか、と言うからな」

「その、"神"のほうから触ってくる場合はどうしたらいいのか、ということなんだが」

「うーん……」

「だよなー」

二人で顔を見合わせて笑い合う。

誰が見ていても気にしない、酔っぱらいというのはそういうものだ。反対車線の到着アナウンスが辺りに響いて、ベンチに腰をおろしていた人々がそわそわと動き始める。そして、行ってしまう電車。また取り残される俺たち。

「でもさー、今日のあれは傑作だったよな」

ニシシ、と梶田が笑う。その言葉であの時の光景を思い出してしまっ、俺も何度か頷く。

「さすがに、とは思ったが」

「とはいえ、あれはどう考えてもツツコミ待ちだと思うだろ…」

「……まあな。今、冷静になって考えてもやっぱり理解できん」

「俺もだ、俺も」

「でも、もともとはカジが撒いた種だからなー」

「え！俺？」

「お前だろ、お前」

分かってるのか酔っているのか、オーバーリアクションを取る彼に、俺はすかさずツツコミを入れたのだった。

溜まってきた空きグラスが気になりはじめた頃、話題は二転三転して、いつの間にか合コンの話になっていた。

俺が合コンに参加することに対して難色を示しているのが気に食わないらしく、山門組——主に、栄さんが——言葉巧みに誘おうとしてきていた。いわゆる、お約束の光景だ。

「梶田くんは来なくていいの！子持ちだし！イケメンだし！」

「えー、いいじゃないすか。俺、盛り上げるの得意ですし」

「そういう問題じゃないのー！」

CAとかイイじゃないですか、そうニヤニヤする梶田の頭をすぱん、と"はたく"栄さん。うーん、結構力が入ってたようだけど大丈夫か。栄さんのワイン消費ペースが早いことが気になりつつも、俺はウィスキーを愛でることにする。まあ、彼女らも俺のことを思って誘ってくれている、はずだと思うのだが。……あ、滝さんがニコニコしてる、怖い。

「ねえ、嵯峨山くん、行こうよー」

「いや、だから俺は……」

「代わりに俺が行きますって！なんでだめなんすかー」

「だーかーらー、何度も同じこと言わせないの！」

「ね。可愛い子来るし、行こうよ、嵯峨山君」

「なんなら可愛い男の子も呼びましょうか？」

「ダメダメダメ！それはだめー！」

滝さんのそのツッコミに過剰反応した梶田が、俺が居るし、と意味不明なことを言う。えーやっぱり結婚するんですね！と蒸し返す滝さん。ああ、これはめんどくさい流れだ。こういうときは黙っているに限る。そういえば梶田も飲みすぎている気がするな、大丈夫だろうか。

えー梶田くんはかわいってよりかっこいいキャラだと思うんだけどなー、そんな見当違いなことを

言っている栄さん。

「あ、そういう山門さんはどうなんすか！結婚！」

突然かじを切ったのは、"その"梶田だった。ん、梶田——カジが、かじを切った……？

「えー！梶田さん、ひどーい！女性にそういうこと聞くのって失礼なんですよー」

「そうよ。ただしイケメンに限らないってこともあるのよ」

「いやーいやいや！でも、気になりますって！」

勝手に一人でウケてしまっていた俺を怪訝な顔で見つめながらも、梶田は山門さんの方へ視線を動かす。

バトンを渡された山門さんは、それに答えることはなく、何やらゴソゴソとしているようだが、既にだいたい出来上がっている女性陣は、その様子に気づくことはない。この隙に話題を逸らそうと、俺は思いついたことをそのまま口に出してしまった。

「そういえば、滝さんは、その、いい人はいないのか」

あ、これは聞いちゃいけないやつか。まあ、この流れだからこそ聞ける話とも言えるのだが。しまったな、と思って滝さんの方を見ると相変わらずの笑顔で、あまり意に介していないようだった。

「ええー、年頃の女の子にそういうこと聞いちゃダメなんですよ？でも、嵯峨山さんだから許しちゃいます」

「え、俺はだめなのに？」

「梶田さんはえっちいから駄目です！」

「なんだそれー、差別やー！」

差別じゃなくて区別です、そう冷たく言い放つ滝さん。うーん、梶田には厳しいな。でも、こんな感じで話題をひっくり返した滝さんが一枚上手か。

危うくセクハラと取られかねない発言を華麗に受け流されてしまった俺は、そのこと安心しつつも、滝さんの器の大きさについて改めて感心していた。

「——はーい！ちゅうもーく！」

その甲高い声が響いたのは、そんな出来事にヤキモキしていたときだった。もちろん、皆の視線は両手を振り上げた山門さんへと集まる。何故か両手を合わせているその姿は、野球のピッチャーが振りかぶっているようにも、剣道で面の構えをしている人にも、店員さんと呼んでいるようにも見える。

思わず辺りを見回してしまうが、幸い、お店は繁盛しているようで、こちらに気を配る様子はない。女性陣は、また何か面白いことが始まるのか、と思っているのだろうか、ニコニコしながら山門さんに視線を集めていた。

「私だって、やるときはやるのだよ！」

その姿勢について疑問をこぼす前に、テーブルへと振り下ろされる。そして、左手に乗せていた右手を、すっと引き抜いた。

そして、現れた光景に、一同は息を呑んだ。

「……、マジか」

梶田のその弦きが、少しだけ遠くを回って、俺の耳に到達した。

——その左手の薬指には、キラリと光る輪っかが輝いていた。

この時間の電車は、概ね時刻表を守ることはない。今日はその悪しきルールを破れるか、というところで、お客様の対応で電車の到着が遅れております、というアナウンスが流れてきた。……今日もお疲れ様だ。駅員さんと、その電車に乗っているであろう車掌さんを労ってあげたいものだ。

「……最近、寝不足だよ」

梶田が子煩悩であるというのは周知の事実だが、子供たちもまた、おと一さんラブらしい。懐いてくれるのは良いことだとは思うのだが。

「話に先に寝ていてもいいよ、って言ってるんだけど、結局ふたりとも起きてるんだわ」

おと一さんと遊びたい、と言われるのは嬉しいんだけどよ。そう付け加える梶田は、言葉とは裏腹に眉を寄せて、神妙な表情を浮かべていた。

「やつら、俺が帰ってくるのが遅いからって、昼寝してるんだと」

「……なるほど、賢いな」

夜起きてられるために、ということか。うーん、愛されてるなあ。パパ冥利に尽きるのだろう。もちろん、子供に夜更かしは良くないのだろうが。

「嬉しいけど複雑だよ。嫁には怒られるし、寝不足だしで、さ——」

その時、大きな警笛と共に、電車がゆっくりとホームへ入ってきた。よっ、と声を上げて立ち上がる梶田。どうやら、少しは酒が抜けてきたらしい。そのまま俺の方に向き直った彼は、悪戯っぽい笑みを浮かべながら、こちらに手を差し出してくる。

「——ほら」

「……まだ介護されるには早いぞ」

「いやいや、これはさっき肩を貸してもらったお礼だ」

「はい、はい、ではお言葉に甘えて」

なに、いつものことだ。幸い酒が入っているし、俺の顔色の変化に気づくこともないだろう。仕方ないなあ、と悪態を付きながらも、俺はその手を、しっかりと掴んだ。

梶田の手は少し汗ばんでいたけれど、暖かった。

終電の一本前の電車は、最後尾の車両というのもあるだろうが、それほど混んではいなかった。

ともすれば三人分の座席を二人で使うこともできたが、いつものように並んで腰を下ろす。手すりにもたれかかってスマートフォンを弄る人、座席で寝入っている人など、この時間らしい光景だ。

「今日は寝てくれてるといいんだけどな」

「子どもたちか？」

「酒臭いと一ちゃんは好きじゃないんだと」

「まだ小さいだろうに。随分と賢いんだな」

「嫁がな、余計なことまで吹き込むんだわ」

二人とも体が大きいから、お互いの腕と足が触れ合う。その時、アルコールの匂いと梶田の香水の匂いに混じって、仄かに彼の体臭が鼻孔をくすぐった。どこか安心する、もうすっかり嗅ぎ慣れた梶田の匂い。まだ暑さの残る時期だし、もはや一心同体となっているワイシャツも、決して通気性が良いとはいえない。

俺はどちらかと言うと汗っかきなので、不快な思いをさせていないか、と気になったのだが、梶田が気にする素振りはなかった。だから、そのことについて尋ねることはしない。

賑やかな発車アナウンスが遠ざかって、電車が大きく揺れる。その度に、梶田の少し高い体温を感じる。寄りかかってくるなよ、といった無粋なことは言わない。むしろ、空調が効きすぎているとも言えるこの車内では、その体温は心地よく感じられて、俺はまどろみかけていた。
通り過ぎていく景色は、いつもと変わらない。

「……」

心地よい揺れと暖かさを感じながら、電車は喧騒から離れていく。
……たまらんな、これは。油断したら寝入ってしまいそうだ。目蓋を緩めて酔いと眠気——その誘惑に身を委ねようとする。

彼の言葉が耳に届いたのは、そんなときだった。

「……夏希(なつき)がさ」

先程よりも少し低いトーンで、彼が零す。

来た。
世間話をするように、ぶっきらぼうに。
足元を見たまま。

通り過ぎていった景色は、いつもと変わらない。

「……なんかさ、コソコソしててさ」

はたから見たら青天の霹靂だろうが、その言葉に俺は一度だっけ頷く。これは、聞いているよというサインだ。

「なんかあったん、とは聞いてみたんだけど」

言葉を探していることはわかる。
鞆を抱える左手が小刻みに震えていることを、俺は見逃さなかった。

「……でも、なんも教えてくれないんだよね」

その薬指に輝く指輪が、電車の揺れに合わせて、小さく揺れていて、どこか収まる場所はないものか、と迷っているようにも見える。

窓から見える景色から、だんだんと建物が姿を消していく。

「もちろん、なにもないってのはわかってるんだけど——」

——飯はうまいし、部屋はいつも綺麗だし、ワイシャツはシワひとつないし。

——子どもたちも、おかーさん、ずっとおうちにいるのー、としか言わないし。

——でも、何か、心配になっちゃって。

「仕事もやってるし、お弁当もおいしいし」

梶田夏希——梶田の奥さんで、今は育児期間中、在宅勤務だ。

デザインをなりわいにしていて、働きながら家事もこなす凄い女性だ。梶田との付き合いで、何度か顔を合わせたこともあるし、その人となりは俺も良く知っている。だから、その話を聞いて、歌を口ずさみながら明日のお弁当を作っている様子が目に浮かんでくるのだ。

電車が走る速度を落としていって、明かりが戻ってくる。

向かいに座っていた男性が、停止の揺れて目が覚めたのか、きょろきょろと、辺りを見回している。

「なんでかなー、俺もさ、わかんなくて——」

——こんなこと、今まであったかなあ。

ドアが開く音とともに、梶田の方に顔を向ける。

その精悍な顔は、少し寂しそうに遠くを見ていて、ちくり、と胸の奥が痛んだ。

「……どうして、こんなに心配になるのかな、と思ってさ」

仕事、最近は忙しかったからかもな、そう言って笑う彼。俺はその言葉に、もう一度小さく頷く。

ドアがゆっくりと閉まると、再び電車は進み始める。がたん、と電車が大きく揺れた。

「……俺のせいなのかな」

——サトシ、俺、どうしたらいいのか、わかんないよ。

その音に、かき消されてしまうかもしれないくらいの声。でもそれは、俺の耳にしっかりと届いていた。

窓から見える景色は、やはり、いつもと変わらない。

……そういえば、いつの日か結婚式のスピーチをお願いされた日も、こういうシチュエーションがあったな。

カジ、と、俺は”親友”の名前を呼ぶ。

「……大丈夫。カジは、大丈夫だから」

大丈夫——その一言だけで、伝わるだろうか。

俺はたぶん、正しい答えを知っている。でも、ここで、それを彼に伝える訳にはいかない。
だから、俺は誤魔化すように、でも誠実に。

「カジは、ちょっと疲れてるだけだよ。だから大丈夫。カジは、カジのままで」

「……うん」

梶田の瞳に、色が戻っていく。良かった、悲しそうな彼の顔なんて本当は見たくないのだから。
その俺の一言で胸のつかえが取れたのか、徐々に柔らかくなっていく彼の表情を見て、いつものように、もう一言付け加える。

「……ごめん。俺は独り身だから、励ますくらいしかできないけど」

「ううん」

本当に嬉しそうに、首を振るものだから、つられて俺まで口元を緩めてしまう。
空いていた右手で、彼の左の膝をぽんぽん、と叩く。それに合わせて左手をぽんぽん、と叩く彼の
手と手が触れ合う。顔を見合わせて、もう一度、二人で笑う。

「……俺は、ここに居るから」

「うん、ありがと……サトシ」

重かったら言ってな、そう呟いた彼は、酔いもあったのだろう、体重を俺に預けてくる。そして、より
強く彼の匂いを感じるのだ。
安心する、でも少しだけドキドキする、梶田の匂いだ。

……この感じは嫌いじゃない。だから——

「もし、なんかあったら、俺、サトシと結婚するから」

「おい、俺の意思は無視か」

近づいた梶田の頭をぽんぽん、と叩く俺。いいじゃん、減るもんじゃないし、と呟く彼を見ていると、
紡ぐ言葉が見つからなくなってしまっ

そういえば、と口にした梶田が、ずっと俺の胸元に顔を寄せてくる。

「サトシって、いい匂いするよな」

「こら、嗅ぐんじゃない。汗かいてるから」

こちとら、気にしてるところを。だが、止めるようなことはしない。彼も、俺が止めないことをわかって
いるのだから、なにぶんタチが悪い。

そんな俺の気持ちを知ってか知らずか、音と立ててスンスンと鼻を動かす梶田。

「気にしすぎだって、俺は嫌いじゃないし」

「そういう問題じゃあ……」

「加齢臭がしてきたら教えてやるよ」

「大きなお世話だ。それに、それはお前の方が必要だろ」

「俺は夏希がいるからいいの」

「あーそうだったな、それは大変失礼しました」

「なんだそれー、このやろー」

そのやりとりが、俺の心に、確かな暖かみと、僅かな痛みをもたらしながら――
後一駅だけのこの時間を大事にするように、俺は目を閉じたのだった。

梶田を見送った俺は、すっかり人気がなくなった車内で、残り十数分ほどの乗車時間を過ごしてい
た。

外の景色はだんだん寂しくなっていくが、暖かくなった胸の中と共に、ようやく一日が終わる、という
達成感もあった。何となく手持ち無沙汰になって、鞆の中を覗く。そして、まだ手に馴染んでいるとはい
えない携帯電話をそと取り出す。

――見覚えがない人がいても、全員先輩が連絡先に登録していた人ですから、安心して下さいね。

何かあるわけではないので心配しなくても大丈夫ですよ、と笑いかける拝島の声が再生される。

これは、RAINの画面を眺めながら、よくわからない人たちが居るのだが……と聞いた時の答えだっ
た。確かに、言われてみると納得感があった。丁寧に姓名で登録されていたのは取引先の部長さん
だったり、見覚えがあるハムスターの画像を使っているのは妹だったり、なるほど、それはアドレス帳
に登録されている人たちで間違いなかった。

それとなく、連絡先を上から見ていってみる。アドレス帳は以前の端末から引き継いでもらったか
ら、時折懐かしい名前を見かけることがあった。中学時代、高校時代の同級生だったり、大学時代の
先輩、後輩などだ。もちろん、ほとんど連絡を取っていない人たちも含まれている。そんな人々にも、
”これ”があれば気軽に話しかけられるのだな、と思うと不思議な気分になった。

やがて一覧の中に、高校時代の親友――おそらく、だが――を見つけて、手を止める。

――藤本(ふじもと)。

彼とは、卒業してからは、年に数回は連絡を取っていたが、いつの間にか疎遠になってしまったのだった。あいつは、今、どうしているのだろう...

その時、端末が震えて、はっとする。

『おやすみ、今日はありがと。』

家についたのだろう、梶田からのメッセージだった。いつもの、二駅前のこのタイミングだ。本当にマメだな、そのメッセージを眺めながら、こちらこそ、と短い返信を入れる。その返信にすかさず絵文字（スタンプ、と呼ぶのだそうだ）を返してくる彼こそ、本当のデジタル・ネイティブなのかもしれない。

まだ手に入れて数日しか経たないというのに、この新しい文字入力手法に慣れてきている自分がそこには居て、最新技術の凄さを思い知ってしまう。いや、手取り足取り教えてくれた梶田と、拝島のお陰だろうか。

最寄り駅到着を告げるアナウンスが響いて、周りがまたそわそわし始める。そろそろ降りる準備をしなければ、と携帯を鞆に仕舞おうとしたところで、相棒が、再びメッセージの到着を告げる。梶田がまだ起きていたのだろうか、確認するためにもう一度メッセージアプリを開く。すると、そのメッセージは、先程思いを馳せていた――

『突然すみません。』

間違ってたらごめんなさい。

もしかして、サガちゃんですか？』

その、"藤本"――セイちゃん、からのメッセージだった。

*** 1章 おわり ***